

関西国際大学における初年次教育の評価 —IR 担当の視点から—

藤木 清
関西国際大学

[キーワード：IR, アセスメントポリシー, 可視化, 学修行動調査, 大学への適応, 学修スキル]

本稿では、全学的な IR を担当している評価センターの視点から、関西国際大学の初年次教育の評価とその課題について述べる。

まず、本学における DP および CP と初年次教育との関係を整理した。DP には3つの態度志向性項目、2つの汎用的技能項目、そして専門的知識・技能の活用力の6項目の力・資質を修得・涵養することを定めている。また、教育内容や教育方法等の方針を定めた CP には、「大学への適応及び学修スキルの修得」のために初年次教育を実施することを明記している。これらの目的を実現するために、入学前には「ウォーミングアップ学習」、入学時には「フレッシュマンウィーク」を実施している。また、入学後には「学習技術」および「初年次セミナー」などの科目を開講している。

ところで、DP に掲げる項目の修得状況を可視化し、評価するためにアセスメントポリシーを作成しているが、これらの評価ツールは、初年次教育など CP に掲げる要素の評価に活用することは困難であり、別途、初年次教育の目的の達成状況を明らかにするための評価ツールが必要である。

そのための評価ツールとして、プログラムごとの参加アンケートや授業評価アンケート、学修行動調査、中退に関する指標などが活用できる。これらの評価ツールを用いて本学の初年次教育を評価した結果、大学への適応については、何らかの不安を抱えている学生が少なからず存在し、特に、入学前のプログラムに参加しなかった学生のケアなどが必要であることがわかっている。一方、学修スキルについては、コミュニケーションスキルや課題解決スキルの修得に課題があることが明らかになっている。

この評価作業を通して、個々のプログラムだけでなく初年次教育全体を評価すること、初年次だけでなく複数学年にわたり評価すること、DP の可視化にとどまらず CP を評価し改善するためのアセスメントプランを作成することが必要であることがわかった。

1. はじめに

関西国際大学では、学生の多様化に対応するために1998年の開学当初から、GPA 制度やアドバイザー制の導入、学習支援センター(現在は「学修支援センター」に改称)の設置を行い、学修・学生支援に取り組んできた(関西国際大学, 2018)。2004年には初年次教育研究開発センター(現在は「高等教育研究開発センター初年次教育部門」に改称。以下、「初年

次教育部門])を立ち上げ、全学的な初年次教育、特に1年生のゼミ科目「初年次セミナー」に関する企画を行うとともに、不適応学生に対する支援策の検討(田中, 2016)や、学修行動調査による学生の現状把握および初年次教育の評価(田中, 2017)などを行っている。

一方、大学全体の自己点検・評価の企画・運営および Institutional Research (IR) に関する業務は評価センターが担当している。評価センターでは学内の学修や教育に関するデータを収集し、現状と課題、あるいは施策の効果について分析を行い、学長・副学長・学部長等の執行部やFD研修会を通じて一般の教職員への報告を行っている。

さらに、2016年の学校教育法施行規則の改正による3つの方針の制定の義務化を受け、本学では「卒業認定・学位授与の方針(DP)」、「教育課程編成の方針(CP)」、および「入学者選抜の方針(AP)」を一体的に見直して制定し、公表した。また、DPに掲げる修得・涵養すべき力・資質の獲得状況を評価するために「学修成果の評価に関する方針(アセスメントポリシー)」を作成した。このような状況を受け、評価センターではアセスメントポリシーに基づいて学修成果の獲得状況を測定し、現状と課題を執行部や教職員に報告する業務を担っている。

本稿では、全学的なIRを担当している評価センターの視点から、本学の初年次教育の、DP, CPにおける位置づけ、および評価と課題について述べる。

2. 関西国際大学のDPとCP

関西国際大学のDPには、卒業要件である126単位の修得と、次の表1に掲げる力・資質を修得・涵養することを定めている。

これらの力・資質は、大きく3つに分類できる。1つ目は本学の教育理念に基づく態度志向性であり、自律性、社会的貢献性、多様性理解が含まれる。2つ目は汎用的技能である、問題発見・解決力とコミュニケーションスキル、3つ目は各専門分野で修得すべき知

表1 DPに掲げる力・資質

	力・資質	説明
DP1	自律的で主体的な態度 (自律性)	自分の目標をもち、その実現のために、自らを律しつつ意欲的に行動することができる
DP2	社会に能動的に貢献する姿勢 (社会的貢献性)	集団や社会のために他者とともに行動し、貢献することができる
DP3	多様な文化やその背景を理解し受け容れる能力 (多様性理解)	世界に住まう人々の文化や社会が多様であることに理解を深め、世界市民として行動できる
DP4	問題発見・解決力	根拠にもとづいて、問題を発見したり解決のアイデアを構想したりする思考力や判断力を身につけ、問題を解決することができる
DP5	コミュニケーションスキル	国内外を問わず、社会生活の様々な場面で、他者の思いや考えを理解するとともに、自分の考えを的確に表現し、意見を交わすことができる
DP6	専門的知識・技能の活用力	自ら学ぶ学位プログラムの基礎となる専門的知識・技能を修得し、実際に想定した場面で活用することができる

表2 DP と CP との対応

DP	教育内容				教育方法		
	専門科目 共通科目	語学教育	初年次 教育	キャリア 教育	アクティブ ラーニング	GS, SL, IS [*]	フィード バックと 形成的 評価
自律性	○		○	○	○	○	○
社会的貢献性	○		○	○	○	○	○
多様性理解	○				△	○	○
問題発見・ 解決力	○		○	△	○	○	○
コミュニケーションスキル	○	○	○	○	○	○	○
専門的知識・ 技能の活用力	○				○	△	○

※ GS＝グローバルスタディ，SL＝サービ斯拉ーニング，IS＝インターンシップ

識や技能の活用力である。そして、これらの力・資質を総合的に活用できる人材養成を教育目標としている。

また、CPにはこれらの力・資質を修得あるいは涵養していくために、どのような教育内容や教育方法、また教育評価を行っていくのかについての方針を示している。教育内容は各学部学科の専門教育のほか、教養教育、語学教育、初年次教育、キャリア教育を実施することを示している。特に、初年次教育は、「大学への適応及び学修スキルの修得」を目的としている。また、教育方法としては、アクティブラーニングを取り入れた授業を行うこと、学外体験プログラムを実施すること、形成的評価のためにフィードバックを行うことなどを定めている。

ここで、DPとCPの各要素の対応を整理すると表2のようになる。

いずれも教育内容と教育方法を組み合わせて、DPに掲げる力・資質を総合的に養成していくものとなっている。この中で初年次教育は、4項目に関連するものとして広く捉えている。なぜならば、初年次教育科目は主に汎用的技能の基礎を修得するものであるが、アクティブラーニングを重視した授業運営により、態度志向性も涵養するからである。

3. 関西国際大学における初年次教育

前述のとおり、関西国際大学の初年次教育の主な目的は、高校から大学への環境の変化に慣れること、および大学での学修方法を修得することの2点である。

これらの目的を実現するために、「入学後」春学期に開講する初年次教育科目だけでなく、「入学前」と「入学時」も含めた初年次教育プログラムを設定している。

まず入学前には、学修支援センターが中心となり、2月までの入学者選抜試験合格者を対象とした「ウォーミングアップ学習」を実施している。本プログラムは、入学者に高校までの授業との違いを体験することで、入学時の不安を軽減することを目的としている。具体的には、3月に対象者に大学に集ってもらい、スタディスキルズの入門プログラムや、ペアワークやグループ学習などのアクティブラーニングの手法を用いたゼミ形式の模

擬授業に参加してもらう。模擬授業ではコモンリーディングを行い、文献や教材は全学で標準化したものを使用している。

入学時には、全学生を対象に「フレッシュマンウィーク」を実施している。内容は、通常の入学時のガイダンスや履修ガイダンスに加え、2年生を中心として学生メンターが各ゼミに1～2名入り、人間関係作りのプログラム等を行うものである。

さらに、入学後の初年次教育として、「学習技術」および「初年次セミナー(ゼミ)」などの正規科目を1年春学期(前期)に開講している。「学習技術」は、図書館やコンピュータを活用した情報収集の方法、レポートの書き方、ノートの録り方、プレゼンテーションの基本など、大学での学びに必要なスタディスキルズの内容で構成している。この科目は、開学当初に学習支援センターで開催していた講習会のプログラム内容を充実させて、必修科目化したものである。一方、「初年次セミナー」はいわゆる1年次のゼミである。内容は、ウォーミングアップ学習で使用した文献を用いたコモンリーディング、批判的思考に関する演習等で構成している。また、前述の学生メンターがグループワークをサポートするなど、授業運営の支援を行っている。

いずれの科目も、比較的少人数クラス(初年次セミナーは上限15名程度、学習技術は30名まで)で開講し、全クラス共通の授業内容と教材でアクティブラーニングの考え方を取り入れて運営している。

4. アセスメントポリシー

ところで、現在、関西国際大学ではDPに掲げる単位および力・資質の修得状況を可視化し、評価するためにアセスメントポリシーを作成している。力・資質に関する主な評価ツールとして、「KUIS学修ベンチマーク」(以下、「ベンチマーク」)、「卒業論文ループリック」、「到達確認試験」を用い、大学機関レベル、学部学科レベル、学生個人レベルの各層での評価に使用する。また、後述する学修行動調査等を補完的に活用している。それぞれの評価ツールの方法や実施学年は表3のとおりである。

ベンチマークは6項目の力・資質を獲得する到達基準をループリック形式で示したものである。1～4年生の毎年3月末(春卒業時は2月)と9月末に採点済みのレポートやテス

表3 DPの評価ツール

評価ツール	手法	実施学年	評価項目
KUIS学修ベンチマーク	学生のループリック自己評価と教員確認 【間接評価】	1～4年生	DP1～DP5
学修行動調査 「適応調査」「進路と学生生活に関する調査」	質問紙調査 【間接評価】	1・3・4年生	DP1～DP5 (補完的)
卒業論文ループリック (未実施)	ループリックによる評価 【直接評価】	4年生	DP6
到達確認試験	筆記試験の実施 【直接評価】	2年生	DP6 (専門基礎知識の修得状況)

トを返却して半年間のふりかえりを行うとともに、次の半年間の目標設定を行う機会を設けている。その際、学生一人ひとりがベンチマークのセルフチェックを行い、アドバイザーの確認を受けて現在の自分の状況を把握する。ベンチマークチェックはeポートフォリオ上で行い、評価センターで学科別あるいは全学で集計し、前年比較等を行ったうえで、執行部等へ状況報告を行っている。

卒業論文ルーブリックと到達確認試験はそれぞれ専門的知識・技能の活用力を評価するものである。卒業論文ルーブリックは4年のゼミ科目「卒業研究」において作成する卒業論文を評価するものであり、現在は試行段階である。また、到達確認試験は2年終了時に各学科の専門基礎知識の定着度を測定する筆記試験であり、2016年度生からこの試験の合格を「卒業研究」の履修登録の条件にしている。

以上のアセスメントポリシーに掲げる評価ツールは、DPの達成度を可視化し、評価することに主眼を置いている。そのため、DPに掲げる項目の現状については把握できるものの、達成度の低いDP項目について具体的に何が問題なのかを明らかにすることや、初年次教育などCPに掲げる一つひとつの要素の評価に活用することは困難である。

そこで、初年次教育の目的である「大学への適応」と「学修スキルの修得」の状況を明らかにするための評価ツールが必要である。

5. 初年次教育のアセスメントプラン

初年次教育の評価ツールとして使用可能なものを表4に掲げる。

一つひとつのプログラムに関しては、プログラムごとに参加アンケートや授業評価アンケートを実施して、効果検証を行い、次年度のプログラムや授業の改善に活用している。

表4 初年次教育の評価ツール

評価ツール	手法	実施時期・学年	評価項目
参加アンケート ・WU※ ・FW※	各プログラムの担当部署が質問紙を作成、集計、分析(経年比較) ⇒教職員に報告	各プログラムの終了時(WUはプログラム開始時)	・満足度、不安度、期待度等 ・自由記述
授業評価アンケート ・正課科目	高等教育研究開発センターが実施 学期末は科目ごとに集計 ⇒担当教員がコメント ⇒学生閲覧	学期中盤および学期末	・理解度、満足度、学修目標・評価方法の明確さ、アクティブラーニング実施状況等
学修行動調査「適応調査」	高等教育研究開発センターが実施(学籍番号記述) ⇒評価センターで分析(経年比較) ⇒執行部や教職員に報告	〈適応編〉 1・2年生 〈学修編〉 1・3年生	・適応、自己肯定感、不安等 ・アクティブラーニング、授業外学修時間等
中退状況調査	評価センターが学科ごとに集計。退学理由が不明な場合はアドバイザーに問い合わせ ⇒執行部に報告	毎年	・中退者数(率) ・中退理由

※ WU=ウォーミングアップ学習, FW=フレッシュマンウィーク

一方、初年次教育の全体的な効果を評価するために、初年次教育部門が「大学への適応に関する調査」(以下、「適応調査」)を実施している。適応調査は、もともと初年次教育の評価ツールとして、適応状況や不適応の原因となる学修技術、学習習慣、経験などを定点観測するために導入した学修行動調査である。2013年から授業外学修時間や能力に関する質問項目を加え、学修成果等を間接的に測定し、DP達成状況を補完的に評価するツールとしても活用している。現在は、6月には1、2年生を対象に主に適応関係を、11月には1、3年生を対象に学修関係に関する調査を行っている。調査結果は、高等教育研究開発センターおよび評価センターがFD研修会等でのテーマに合わせてGPA等の他のIRデータと連結して分析を行い、現状や課題について執行部や教職員に報告を行っている。

さらに、適応状況を把握するためには中退者数や中退理由なども指標として活用する。

6. 初年次教育の評価

(1) 大学への適応

まず、ウォーミングアップ学習やフレッシュマンウィークなどの入学前、入学時の各プログラムの満足度は高く、入学後の各初年次教育科目の授業アンケートも他の科目と比べて決して低くはない。

また、2014～16年度生の1年生を対象とした適応調査によると、「学習面でうまくいっているか」「対人関係でうまくいっているか」「生活全般でうまくいっているか」の質問項目(それぞれ4件法で回答)に対して、学習面については6～7割の学生が、対人関係および生活全般については、おおむね8割程度学生が肯定的な回答をしている。

しかしながら、同じ調査で「なんとなく不安になることが多いか」について肯定的な回答をしている学生は約6割、「いつも何かに追い立てられているような気がするか」の質問に対する肯定群の割合は約4割存在する。

さらに、2年生を対象とした調査では、不安感を感じる学生の割合が若干増加し、適応度が若干低下する傾向にある。

以上の結果からは、様々な初年次教育の施策を行っているものの、何らかの不安を抱えている学生が少なからず存在していることが課題として挙げられる。もちろん、学生個人や学科集団の特性の影響を考慮すべきであるが、2014年以降の1年生の中退率が、若干上昇傾向にある点からも何らかの改善が必要であると思われる。

もう一つの課題は、ウォーミングアップ学習に参加しなかった学生のケアである。ウォーミングアップ学習は前述のとおり、2月までに合格した新入生を対象としているため、3月に確定にした新入生をはじめとする不参加学生が少なからず存在する。学部学科によって異なるが、ウォーミングアップ学習に参加しなかった学生の割合が高い傾向にあることがわかっている。

このような学生の対応は各学部学科で対応策を講じている。例えば2018年度、ある学科では、フレッシュマンウィークのなかで下宿生が集い、先輩の話を聞いたり、グループワークを行ったりする新たなプログラムが企画・実施された。このプログラムは、中退学生の多くは下宿生が多いのではないかという経験から企画されたものである。実際、多くの学科では、在学学生よりも中退した学生のほうが、下宿生が多いことがデータから裏付けられている。

なお、上記の例のように、適応調査等のデータは、全体的な状況把握や評価には有用であるが、予測にはほぼ使用できないことに注意する必要がある。例えば、2014～16年度生の在学者のうち、1年時の適応調査で「いつも何かに追い立てられているような気がする」の質問に対する肯定群の割合は4割に満たないが、中退者の中では、同じ調査項目の割合は6割弱である。つまり、不安感の中退との関連性がある程度認められるものの、中退を予測することはできない。この点は、下宿生の割合についても同様である。

(2) 学修スキルの修得

次に、学修スキルの修得状況について述べる。前述の適応調査に、17の能力項目について入学後の変化(増減)を回答する質問を設定している。これらの項目は2008年の中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて(答申)」で示された「学士課程共通の学習成果」を参考にしたものである。この質問に対して能力が「増えた」と回答した学生の割合を、1年時と3年時で比較してみた。

2014～16年度生のデータで比較的割合が低く、しかも学年が上がっても高まりにくい項目は、書く力・読む力・外国語4技能などのコミュニケーションスキル、それに、数量的スキル・情報リテラシー・論理的思考力・問題解決力などの課題解決スキルである。

一方、相手の意見を聞く力・協調協働する力・規範遵守などの対人関係力は1年生の時点でも比較的増加したと感じている学生の割合が高く、3年生の時点ではさらに高くなる。

これらの結果から、アクティブラーニングを取り入れた授業を初年次から実施することで、対人関係力は高まったと感じている学生は比較的多いものの、課題解決スキルが高まったという学生はそれほど多くはない。当然ながら、課題解決スキルは一度授業を聞けば伸びるというものではなく、繰り返しトレーニングが必要なものである。そのためには初年次教育科目だけでなく、同時に履修する科目や初年次以降に履修する科目との連携が必要になってくる。

また、書く力・読む力は大学での学びの最も基本的なスキルであるが、別の調査で図書館の資料活用が減少傾向にあることもわかっており、喫緊の課題であると言える。

7. 初年次教育の評価に関する課題—結びに代えて—

以上、本学の初年次教育についてDP, CPでの位置づけを整理したうえで、IR担当者の視点から評価を行った。この作業を通して、初年次教育の評価には以下の諸点を考慮する必要があることがわかった。

一点目は、初年次教育全体の評価が必要であるという点である。個々のプログラムや科目では、それぞれ満足度調査や授業評価アンケートを実施して次年度への改善に資しているが、初年次教育全体の評価としては不十分である。

二点目は、本学の初年次教育の目的の一つである「学修スキルの修得」については、初年次教育科目の履修のみで達成できるものではなく、長期にわたり繰り返しトレーニングすることが必要となるため、複数学年にわたり定点で測定し評価に使用する必要があるという点である。

三点目は、現在作成しているアセスメントポリシーはDPに掲げる学修成果の達成度の測定・評価のみを想定しており、初年次教育の評価には不十分であるという点である。

学修成果の可視化は評価改善のために重要であることは言うまでもない。それに加え、

初年次教育をはじめ CP を評価し改善までの道筋を考慮したアセスメントポリシーの充実、もしくは別途アセスメントプランの作成が必要であろう。

参考文献

- 関西国際大学(編)(2018)『大学教学マネジメントの自律的構築—主体的学びへの大学創造二十年史—』東信堂。
- 田中亜裕子(2016)「大学不適應学生の個性に応じた支援策の検討」『教育総合研究叢書』, 9, 19-24.
- 田中亜裕子(2017)「学生データを活用した大学適応型初年次教育の実践—関西国際大学の事例を通して—」『初年次教育学会誌』, 9(1), 21-26.
- 濱名 篤(2016)「高大接続改革に対応した入試と初年次教育へ—関西国際大学の事例を踏まえ—」『初年次教育学会誌』, 8(1), 129-138.
- 濱名 篤(2018)「高大接続改革と初年次教育」 初年次教育学会(編)『進化する初年次教育』世界思想社, pp. 44-55.